

NAVIFY® Tumor Board



エキスパートパネルを
実施する私たちにとって、
とても有益なツールに出会えた。

VOICE of EXPERT

Vol.1

前編

神奈川県立がんセンター がんゲノム診療科 医長
がんゲノム診療センター センター長

廣島 幸彦 先生

がんゲノム医療の拠点病院として指定され、遺伝子パネル検査で多くの実施症例を持つ神奈川県立がんセンター。同施設においてがんゲノム医療の中核を担う「がんゲノム診療センター」の廣島幸彦先生に、エキスパートパネルをサポートするクラウド型ソフトウェア「NAVIFY Tumor Board」の使用感についてご意見を伺った。

エキスパートパネルを実施していく
上での課題や負担を
「なんとかしたい」と思っていました。

—— 神奈川県立がんセンターは、**2019年9月**にがんゲノム医療拠点病院に指定されましたが、現在のがんゲノムパネル検査の実施状況についてお聞かせください。

神奈川県内には、当院を含めてがんゲノム医療の拠点病院が3施設あります。聖マリアンナ医科大学と東海大学付属病院、そして当院になりますが、その拠点病院の中で連携施設を持っているのは当院だけとなり、神奈川県立こども医療センター、昭和大学横浜市北部病院、藤沢市民病院、そして横浜市立みなと赤十字病院の4施設と連携して遺伝子パネル検査を行なっています。

当院では2020年5月までの時点で211症例と

いう実績がありますが、これは他の名だたる中核拠点病院と比較しても、かなり多い数になっております。

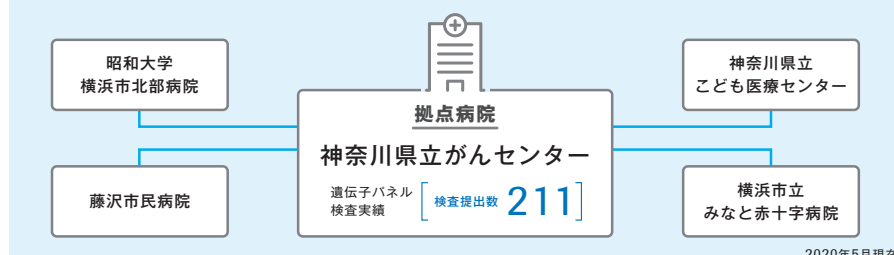
—— エキスパートパネルの実施にあたり、課題や負担となっていたのはどういったことでしょうか。

エキスパートパネルを実施していく上で、いくつか問題点がありました。まず一つ目は、エキスパートパネルは日本語で言うと専門家会議、いわゆる会議体なので、プレゼン資料を作る作業

がとても大変です。たとえば、参加者が作成する資料のフォーマットもバラバラになりがちです。ただ、クオリティを維持して会議を成り立たせるという意味では、やはりフォーマットの統一は必要であると、常々思っていました。

あともう一つは、臨床情報を含めた連携病院との情報共有ですね。その辺りは当初から苦労していて、はじめはメールでやりとりしていましたが、そこにも限界を感じていて、何かいいソリューションはないかと考えていたところです。

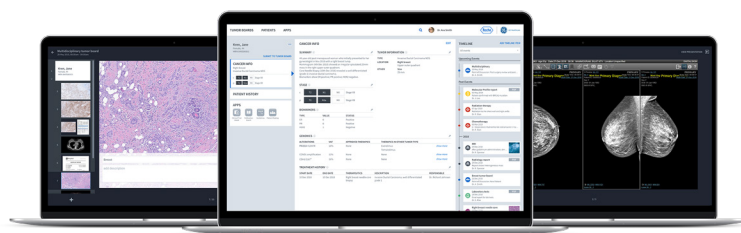
神奈川県立がんセンターの連携病院



2020年5月現在



エキスパートパネルの準備から 治験の再検索まで。 クラウド型ツールの良さを 実感しています。



—— 神奈川県立がんセンターでは、**2020**年の秋に**NAVIFY Tumor Board**を導入されましたが、どのようなことが改善されましたか？まずは、エキスパートパネルにおける資料の準備について教えてください。

今回ロシュのNAVIFYを導入しましたが、基本的に情報を入力する場所や内容がすべて決まっているので、エキスパートパネルで使用する資料のフォーマットが統一できるところが便利です。

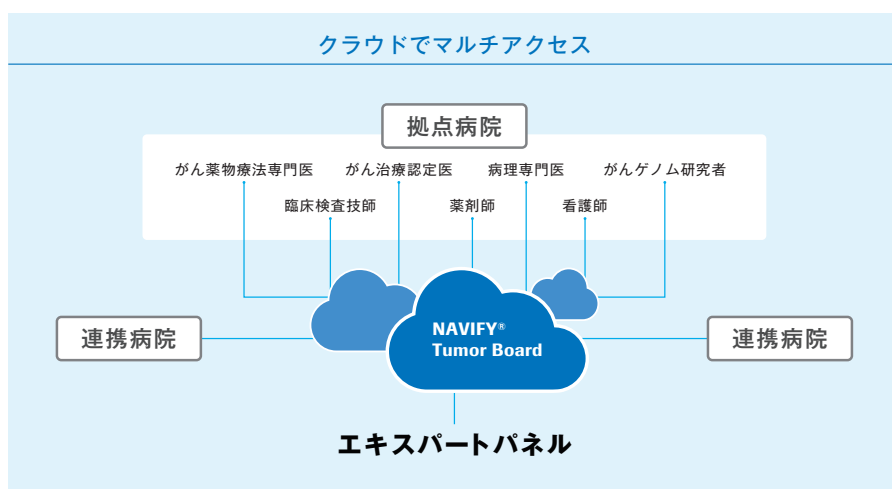
たとえば、入力漏れや議論の時に必要な情報が抜けるということはまずありません。また、実際のプレゼンテーションの画面ですが、連携病院の先生からも「非常にわかりやすい」というお言葉をいただきました。

そのような周りの反応からも、NAVIFYの基本フォーマットが、かなりよいものに仕上がっていると感じています。

—— 連携病院との情報共有という点では、いかがでしょうか。

NAVIFYはクラウドになっているので、私が入力することはもちろん、同時に連携病院のほうからもアクセスして入力することができますよね。つまり、双方向から一つの資料を作成できる

ので、情報の共有がとても簡単です。クラウドというと、セキュリティについて心配される方もいるかもしれませんが、NAVIFYは国内にデータベースサーバーがあり、3省のガイドラインにも準拠しているのでとても安心です。



—— その他、**NAVIFY**を導入して効果的だったことは、ありますか。

エキスパートパネルを実施するたびに、一例一例の必要情報をNAVIFYに入力します。



そこには、遺伝子変異の情報やその時オープンになった治験情報も入っていますが、入力した情報はCSVファイルとしてエクスポートできます。そのデータを見れば、遺伝子ごとに見直す作業などが簡単にできるので、わざわざ別にデータベースを作る必要がないわけです。今後、連携施設でもNAVIFYを利用すれば自施設の症例を見ることができるので、データベースとしての役割が非常に大き

くなってきます。

また、NAVIFYにはクリニカルトライアルマッチという機能があって、エキスパートパネルの準備で入力した情報を元に、自動的にがん腫や遺伝子変異を検索して、該当する治験を見つけてくれます。また「なぜその治験が選ばれたのか」という理由づけをはっきり示してくれるので、とてもわかりやすいですね。

私は主にC-CATの調査結果を確認するためにその機能を利用していますが、漏れなく確認できるという意味で、とても有益なアプリケーションだと考えています。

また、遺伝子パネル検査の今後の展望ですが、今よりも件数は爆発的に増えていきます。やはり、ハイ・スループットにそういうものを処理していく、あとは情報を共有していく、データベースを作っていくということが、非常に重要な位置

づけになってくると考えられます。そういう意味でもロシュのNAVIFYは、非常に有効なツールではないかと個人的には考えております。

神奈川県立がんセンター

都道府県がん診療連携拠点病院として、神奈川県内のがん医療の中心的な役割を担う施設。がんゲノム診療センターを有し、がんゲノム医療の拠点病院として1年間に200例以上のエキスパートパネルを実施している。

